

## ピントのずれ 安田百合絵

・政権を支持する友が美しくこちらへリモコンを構える

・「玄関は0.1ミリシーベルト」とのみ告げて係員去る

千種創一 『砂丘律』

千種創一の歌は、中東での生活を描いた連作中の一首。「政権を支持する友」という表現によってにわかには、さりげない仕種が銃口を向ける凄惨なシーンを想起させるようになる。二首目は数値を告げて去る係員の存在により、不可視の放射線がある種の不気味な実感を帯びはじめ。こうした手法が使われるのは、もちろん決して珍しいことではなく、今に始まったことでもない。風景や現象を淡々と写しとることがかえって強いインパクトになるという逆説は、短歌ではほとんど常識的な定説であるとも言える。

・不安なる今日の始まりミキサーの中ずたずたの人参廻る

塚本邦雄 『裝飾楽句』

・絵のまへでつばめのやうになることがなぜか群集を規定してゐる

岡井隆 『岡井隆歌集』

前衛短歌の騎手と言われた塚本邦雄、岡井隆の両氏においてさえ、レアリスムが不気味な効果を産みだすこれらの歌が見られる。

ただ、今回考えてみたいのは、それと同じ原理が背後に駆動しているのが感じられるもの、どこか毛色の違う（ように感じら

れる）いくつかの歌についてである。

・鮭の死を米で包んでまたさらに海苔で包んだあれが食べたい  
木下龍也 『つむじ風、ここにあります』

・やぶる が答えの問題の挿し絵の破いてる子が笑ってたこと  
伊舎堂仁 『トントングラム』

・丁寧にくらしている中年の女をすこく好きになって背後から性器をねじこむ  
フラワーしげる 『ピットとデシベル』

例として挙げたこの三首においても、あるものがあるがままに描くという点はこれまでの歌と同じのだが、ただ、何かが違うという漠然とした印象、もつといえは違和感のようなものを覚えずにはいられないのである。（蛇足だが、レアリスムとは作者の現実というより妥当性や蓋然性にかかわるものであり、作者の経験が反映されているかということでは一切関係ない。）

これらの歌の異様さは「ピントのずれ」に由来するものだろう。「おにぎり」を「鮭の死を米で包んで海苔で包んだもの」と言い換えるとき、その極端な微視は異化作用として働き、読み手の不安をそそらずにはいない。二首目も、本来ならノイズとして見逃される情報にスポットがあてられることで、「やぶる」ことの暴力性が質感をもつて立ち上がってくる。三首目も過剰な抽象化と具体化が際立ち、忘れがたい読後感を残す。

これらの歌に見られる、世界に対するほとんど悪意すら含むような徹底した距離のとり方には、（それが全く新しいものだとは言えないにせよ）新しい可能性を感じる。レアリスムが幻視とは違う方向に突き抜けてゆく現場に立ち会っているということなのかもしれない。